フェンダーのどのモデルにも
ひとつ、ふたつ茶飲み話のようなエピソードがある。
フェンダーこぼれ話を集めてみた。チューニングノート。

NOTE

フェンダーベース求む。

プレシジョンベースの出現が巻き起こした珍事は多いが、中でも、ミュージシャンユニオンのカテゴリーの中に「エレクトリックベース」ではなく「フェンダーベース」という職種が加えられたことは、ことの大きさを語るのにもってこいの例である。

つまり、エレクトリックベースと言えば、フェンダー・プレシジョンベースのことであり、また、ウッドベースにさよならを言って、エレクトリックベースに弾きかえるミュージシャンが、いかに多かったか。

「フェンダーベース、でなくてはベーシストではない」といった風潮もあったようで、バンドでツアーを組む場合も、正確でパワフルなサウンドと、簡単に移動できるコンパクトなサイズのプレシジョンを持っていることが、条件になっているバンドもあったくらいだ。

テリーとストラトは兄弟なのだ。

テレキャスターの成功によって、エレクトリックベースの製作が始まった。

一九五一年、プレシジョンベースが登場する。

五一年プレシジョンは、テレキャスターをそのままスケールアップしたスタイルで、例えば、ボディやヘッドストックのスタイル、木資材、ピックアップ構造などを見ると明らかにテレキャスターからいただいたという感じがする。

ところで、ストラトキャスターの方は、と言うと、このギターもやはりテレキャスターの一部をいただいている。

信じられないかもしれないが、ボディ形状が基本的に同じなのだ。

テレキャスターとストラトキャスターのボディ図面を重ねると、テール側からウエストのあたりにかけて、まったく同サイズ、同曲線なのである。

ボディにウエストカットをした見事なストラトのコンタードボディの線が翻案する、マジックなのである。

叩いて、削って、直せ。

オールドフェンダーの製作年を割り出す方法はいろいろあるけれど、次の方法がポピュラーだ。

その①

1948／49年のブロードキャスターならば、3ケタの数字がブリッジプレートに刻まれている。

1950／54年のテレキャスターとプレシジョンベースは3ケタか4ケタの数字がブリッジプレートにスタンプされている。

1953／54年のストラトキャスターは、4ケタの数字がネックのジョイントプレートに入っている。

1955／56年の全機種とも、4ケタの数字がネックジョイントプレートに入っている。

1957／60年は5ケタの数字が、

1960／64年はL＋5ケタの数字がネックジョイントプレートに入っている。

その②

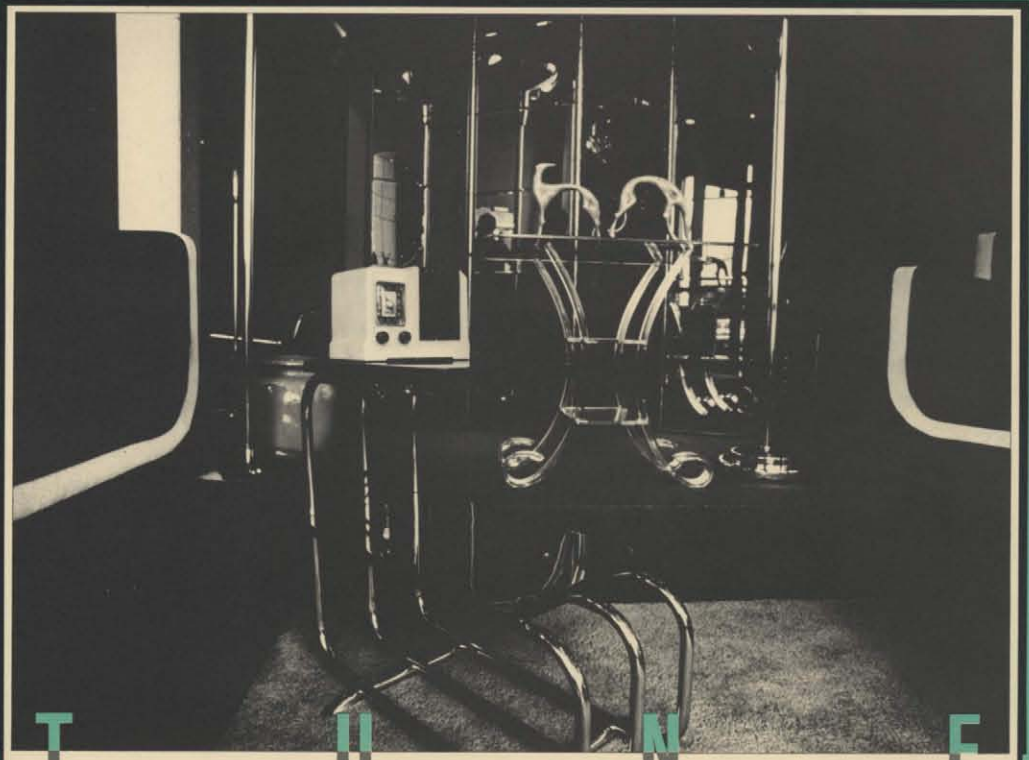
色、形、握った感じ、弾いた感じで割り出す。

その①は誰にでも出来、よく知られているが、その②の方は十分な経験と確かな目が必要なので、いわゆる「通」にならないとダメだと思う。

しかし、例え「通」であっても鑑定に1～2年の差が出ることがある。これは楽器自体のバラツキによる誤りで、しばしば鑑定する人を悩ます。

現在のように、マスプロダクション・システムが整っていなかった中で作られた初期のフェンダーは、同じモデルでも作業する人のタッチで仕上がりが違っていた。三角ネックのつもりでも、Uネックのようになったり、ボディ形状やデカールの位置、コントロールパネルの各パーツの材質など、感覚と感性、臨機応変なクラフトワークが「百本全部が同じもの」を作らなかったのだ。

「叩いて、削って、直せ」という職人芸が生んだ、誉れあるバラツキなのである。



TUNE

カントリーも好き、ジャズも好き。

オリジナルのテレキャスター（ブロードキャスター）の配線がコンデンサーを使った音質変化に特徴があることは、よく知られている。

しかし、この配線が初期のテレキャスター三角ネック同様、当時のポピュラーミュージックの演奏スタイルやサウンドに合わせた苦心のワイヤリングであった、という事実を知る人は少ない。

オリジナルのワイヤリングは、スイッチをリード側（ブリッジ側）にするとシャキシャキのカントリー&ウエスタントーンになり、センターポジションでフロント側（リズムピックアップ）のノーマルなトーン、そしてフロントポジションでリズムピックアップの高域を抑えた甘くソフトなジャストーンに切替わる。

ジャズギタリストが簡単に親指で五、六弦がおさえられるようにと、ネック形状を三角形にしたように、カントリー&ウエスタンギタリストはもちろん、ジャズギタリストにも享受できるエレクトリックギターを、と考えられたスイッチングなのだ。

もっと自由にギターをつくろう。

テレキャスターとストラトのボディの輪郭は同じである。

つまり、プロトタイプのストラトはテレキャスターのように、エッジが角ばっていた。

じゃ、ストラトのコンタードボディを考えたのは誰なのだろう。

一九五三年、レオ・フェンダーと、主任設計師のフレディ・タバレスは、ストラトキャスターのプロトタイプを、工場に出入りするギタリスト達に試奏させ、意見をきき、完成へと一歩ずつ近づいていた。

そんな時、よく工場にやってくるレックス・ギャリオンというギタリストが面白いことを言った。

そもそもレオのギターは、「板切れにピックアップを付けて、弦を張ったギターだ。

最初から、すべて自由なんだ。

どーだい、いっそのことこの腹と肘のあたる部分を削って、弾きやすくしたら」

ストラトのコンタードボディは、彼のひと言で決まった。

いいことだと思ったら、すぐ実行する。

フェンダーのポリシーを語るエピソードである。

なかなか、かえらない、黄金の玉子。

ストラトキャスターは一九五四年に登場した。

しかし、アイデアそのものは一九四〇年代からあった。

完成までに五年以上の年数を費した理由は、テーマがあまりにも大きく、ひとつひとつのコンセプトをつめるのに時間がかかったからである。

プロトタイプが陽の目を見るのは、一九五三年、フレディ・タバレスがフェンダーに参加する時まで待たなくてはならない。

「入社したての私に、ラフな図や几帳面に書かれたコメントがつまったメモを持ってきて、〝こんなギターをつくってくれ〟ってレオは言った。

伸のいい友人が、面白い計画をたてる時の感じでね。メモを見た時、なかなかかえらない玉子、それも黄金の玉子だって思ったね」とフレディは当時を振り返る。